

特別賞

広島県知事賞

夜の町の電話ボックスぽつねんと待つということほの灯るかな

(三〇二) 広島 近藤道子

(評)

最近では、町の中で、電話ボックスを見かけることが、ぐんと減りました。たまに見かけると、あまり使われていないせいか、少しくすんでいます。そんな電話ボックスを、あたたかみのある存在として詠んでくださいました。電話ボックスが光るというのではなく、「待つということ」が「ほの灯る」という、その感性の鋭さに、胸打たれました。こんなふうに素敵に詠んでもらえて、電話ボックスも喜んでいることでしょう。

日本歌人クラブ賞

祖父祖母と父を送りし我が母へ食事のエプロンそつと結びぬ

(四二) 広島 横山嘉代子

(評)

家族を大事にしてきた「母」を、今は「我」が大事にしてあげています。「母」の働きのかけで家族がここまでつながってきたことを、リリカルに詠んでくださいました。「母」が元気だったころは、台所に立つために「エプロン」をつけていたのでしょうか。でも、今は、母の食べこぼしを受けるための「食事のエプロン」を使っているのでしょうか。「我」の優しさに、ぐっときました。

広島県歌人協会賞

ペットボトル握れば遠い八月の「水をください」なお響いている

(三九一) 大阪 秋吉和紀

(評)

誰もが簡単にペットボトル飲料を買える時代です。自販機でも、コンビニやスーパーでも。暑い日にペットボトルの冷たい水を飲むのは、最高です！でも、八月になると、つい考えてしまいます。原爆の犠牲になった方々は、「水をください」と言いながら亡くなったのではないかと。今、手にしたばかりの、きれいで美味しい水をたたえたボトルを眺めつつ、戦争の酷さを思う夏です。

山口県歌人協会賞

オルコット、モンゴメリーとゐし日々をともしびとしてうす暮れを生く

(二四二) 山口 宮田則子

(評)

オルコットは『若草物語』を、モンゴメリーは『赤毛のアン』を書きました。小説家になりたいと願う少女・ジョーは、勝ち気で、自分の意見を通し、いずれその夢を叶えます。おしゃべりな少女・アンも、人々の愛情を受けて、教師になり、短編小説を発表するようになります。そんな主人公たちにあこがれていた人が、今、こうして歌人になりました。豊かな人生の旅路を詠む喜びは、これからです。

宮島全国短歌大会実行委員会賞

ガーベラの赤迷いなくすつと立つ一筋の恋告げるところに

(二二六) 広島 水川 孝子

(評)

「二筋の恋」という表現に、ハッとさせられました。恋心を貫き通そうとする芯の強さを感じました。また「ガーベラ」が立つのではなく、「ガーベラの赤」が立つというふうに詠まれていて、その赤さを強調しているところにも惹かれました。もしガーベラが話せたなら、胸の奥に秘めた恋を打ち明けてくれるでしょうか。そんな想像も膨らみます。

広島県教育委員会賞

喉のみが欲するにあらず総身に水筒の底天に向け飲む

(二八四) 熊本 石橋 和枝

(評)

よく「喉が渇く」とか「喉を潤す」と言いますから、私たちはなんとなく「水を飲む」というのは、喉のためだ」と思いがちです。でも、本当は、飲んだ水が喉に留まるはずもありません。水を欲しているときは、まさに「総身」が欲しているのです。飲みものを欲し、それを思い切り飲んだときの快感までも、呼び覚ましてくれる爽快な一首です。

廿日市市長賞

9 条は未来を護る命綱 高校生の美希ちゃん記す

(三九四) 広島 三原 豪 之

(評)

政情が不安定で、私たちの価値観も大いに揺さぶられる現在ですが、これから生きる人たちのために、いちばん大事なものは「平和を守ること」です。「高校生の美希ちゃん」が記してくれた言葉に、勇気づけられます。そして、平和への思いを受け継ごうとしている人同士のつながりの象徴が、「命綱」の「綱」という字なのでしょう。

廿日市市教育委員会賞

この夏も慰霊の丘に花を置く 被爆者数多来し村に住み

(五四三) 広島 中村 武

(評)

この歌の主人公は、人の心を知り、人を守ることできる、あたたかい方です。多くの被爆者が移り住んできたという村に住み続けてきたことを誇り、この地で亡くなった方のために祈りを捧げています。もともと古典和歌には、土地を讃えるという意図がありました。この歌は、村も、この村に住んでいた人も、どちらも讃えて詠まれています。

嚴島神社賞

ロッテンマイヤーさんに叱られるよと段ボールを足で動かす女をからかう

(三) 島根 佐々木 信 実

(評)

「ロッテンマイヤーさん」は、シュピリの『アルプスの少女ハイジ』に出てくる教育係です。ハイジの素行をいちいち注意します。でも、ハイジは、生きることには絶望せず、大好きな山に戻る日が来るまで自分の思いを貫くのです。この女の人も、ハイジに通じるような個性の持ち主なのでしょう。逞しく生き抜く人のいる職場の一コマ。

宮島観光協会賞

世の中に評価されぬは常にありピアノニッシモでたたく鍵盤

(二四〇) 広島 山口 順子

(評)

職場でも学校でも、評価してもらえず、落ち込むことばかり。そんなとき、ピアノが弾けるなら、フォルティシモで気持ちよく音楽を奏でたくなりそうですが、この歌では「ピアノニッシモでたたく鍵盤」と詠まれています。ピアノニッシモのほうが、辛さに寄り添える。自分の理想の音楽を生み出せる。自分の心のあやし方を知っている人の歌です。

中国新聞社賞

右耳が難聴のわれ美術館で本物まえに静寂^{しじま}をききぬ

(二五五) 山口 古賀 正 浩

(評) 「難聴のわれ」が、美術館で本物の名画を前にして「静寂」を聴いた。それは「聴こえない、聴こえにくい」という枠ではなく、感性をフル稼働させて、自分が聴くための「静寂」を生み出したのでしょうか。美術作品を通して自分自身と向き合うとき、人は静けさを求めます。自分らしさを広げていくための静寂です。

NHK広島放送局賞

施設での母の暮しが滲みたる名を記すタオル捨てがたくいて

(二六二) 広島 井 上 愛

(評) 介護施設に入った「母」が使っていたタオル。施設に入るときには、みなさん、それぞれの持ち物に記名することになっており、「私」も「母」のタオルに名前を書いてあげたのでしょうか。何度も使われ、その名もぼやけてきたタオル。施設での「母」の日々を思うたび、「私」はせつなさを噛みしめてきたことでしょうか。きっとタオルを抱きしめながら。

中国放送賞

手を伸ばせば届きそうで届かない「和平」と書いてありし看板

(二四九) 山口 薄 田 幸 子

(評)

「わへい」ではなく「かずひら」と読むのかもしれませんが。「和平」という看板のある料理屋さんでしょうか。でも、世界各地で戦争が続く今、「和平」というと、つい世界情勢を思ってしまう。お店の入口の上に飾られた看板に手が届かないように、私たちは真の「和平」にまだ到達できていません。届かないもどかしさが見事に詠まれた歌。

広島テレビ賞

あんたがおらんと寂しいと母が泣く小さくなりて吾子になり給ふ

(四五七) 山口 安 久 裕 子

(評)

お歳を重ねると、人は幼子に戻ります。「母」に会いに行つて、あれこれお世話をし、いざ別れを告げると、「母」は「あんたがおらんと……」と泣くのです。その姿を、ただの幼子ではなく「吾子」と捉える、その包容力に感動しました。いつしか親も弱つていき、子の世代がささえていくことになります。その力を、この歌からいただきました。

広島ホームテレビ賞

熊本の暑さは如何にシャワーしてシャツ洗ふ水まづはあれかし

(五二九) 広島 木戸 博 恵

(評)

熊本の大地震。避難所での日々は、どんなにお辛いことでしょう。胸が痛みます。誰もが「熊本に食料を、水を、届けたい」と思いますが、この作者は「シャワーしてシャツ洗う水」があつてほしいと詠みました。それは、日々のあれこれを細やかに捉える生活者の視点。被災地に心を寄せて歌を詠むことも、世の中を動かす一歩となります。

テレビ新広島賞

「パパが好き」 呪文のように言う四歳児 よんさい 指のキツネに月をかじらせ

(四四九) 愛媛 檜 垣 由美子

(評)

この「四歳児」がかわいいですね。本当に「パパが好き」で、いつもそれを口にしているお子さんの真剣さを感じます。下の句はパパの動作でしょうか。パパを真似ている子の動作でしょうか。昔話に出てくるキツネのように、この父子がかわいらしく思えます。今回、「母」を詠んだ歌が多く寄せられましたが、これは「父」を詠んだ名歌です。

優秀賞

かみさんが叫んで噴射する前にハエトリグモを窓から逃がす

(二七) 愛媛 園部 淳

後ろ手に閉めれば忘るるヒロシマを引き止めるごと油蟬鳴く

(二五) 広島 岩本 幸久

啜り泣く母にひと匙食ませんと丸くまあるく林檎擦る夜

(六四) 広島 富田 清人

ボルシチのビーツの色のカーディガン白寿迎える施設の姑ははに

(八五) 山口 倉谷 節子

イソップもアンデルセンも知らぬなりあまた子どもの消えゆく世界

(二二二) 山口 木原 樹庵

蛇莓手のひらいっぱいを見せられる村で二人の小学生が

(二六六) 山口

近藤 順子

帰宅後の息子の靴に「お疲れさん」就眠まえのトイレをすます

(二八〇) 広島

山本 友栄

「ママ、だっこ」甘える先にママがいるいまは平和な広島の間

(二九三) 広島

岡田 寿子

我の名も弟の名も忘れ果てこれまた平等母の優しさ

(四三二) 福島

小林 薫

青空を円を描きてゆつくり飛ぶ白鳥みたいだあれが軍機だ

(四五二) 千葉

猪野 富子

暑き日は亡母にせがみしちらし寿司を思ひつつ墓洗ひをり

(四六三) 大分

油布 晃

芳しき林檎四個を頂いて見合う重さの近況を聞く

(四九三) 広島 湊谷文野

お隣りの墓も粗末にされている供花を半分供えて帰る

(四九六) 徳島 小畑定弘

あなたより宝受け取るごとく聴くミヤジマトンボ生息のニュース

(五四九) 広島 三澤明美

ふり向けば在るはずの海を覆うビル くらげのごとき月とさ迷う

(五五〇) 広島 山口泰子